岡山県立矢掛高等学校の制服の歴史

日本大学准教授・刑部芳則

岡山県立矢掛高等学校の歴史は、明治 35 年（1902）に創設された矢掛中学校に始まります。大正２年（1913）には小田郡矢掛尋常高等女学校附設矢掛女学校が創設され、同 4 年に矢掛町立実科高等女学校、同９年に岡山県矢掛高等女学校、同 12 年矢掛町外七か町村組合立女学校と改称されます。昭和 14 年（1939）に岡山県に移管され、岡山県立矢掛高等女学校となります。昭和 24（1949）年４月に矢掛中学校は岡山県立矢掛第一高等学校、矢掛高等女学校は岡山県立矢掛第二高等学校となり、同年８月に両校が統合され岡山県立矢掛高等学校となります。矢掛中学校が開校してから 120 年の歴史がありますが、その間に制服にも変化が見られます。ここでは男子校であった中学校、女子校であった高等女学校の時代も含め、矢掛高等学校の制服の歴史を振り返ります。

矢掛中学校

明治 43 年（1910）３月卒業

大正時代後期

明治 38 年卒業（最古の写真）明治 41 年卒業（制服は５個釦だが、７個釦もあった）

明治 43 年卒業（６個釦）　大正時代後期の夏服

左襟には「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」という襟章をつけた。夏の制帽の上部には白の覆いをつけた。夏服の色はグレーか茶褐色だと思われる。脚のゲートルは軍事調練時につけたのだろう。

大正時代後期　歯の高い下駄を履いて通学する生徒も多かった。

昭和 14 年（1939）卒業

昭和 16 年（1941）卒業

昭和 17 年（1942）卒業

昭和 15 年度から左胸に番号札をつけ、翌 16 年度からは苗字札へと変っています。制帽を取ると、坊主頭に近いほどの短髪をしていました。メガネはどの生徒も戦前に流行したロイドメガネをかけています。

矢掛町立実科女学校

大正６年（1917）卒業

大正９年（1920）卒業

岡山県矢掛高等女学校

大正 14 年（1925）卒業

大正 11 年度の卒業写真から全生徒が紋付となりました。後列右端の２人が大正 13 年制定の初代洋式制服を着ています。

大正 13 年制の初代制服

（大正 15 年卒業）

胸当てのあるテーラーカラー、大黒帽にベルトというスタイルは、当時のバスガールの制服に似ていました。大正 14 年度からベルトの中央にバックルがついています。多くの高等女学校では、修学旅行先でバスガールに間違えられた生徒たちが憤慨しました。昭和２年度からは大黒帽が消え、昭和４年度から左胸に校章バッチをつけるようになり、ベルトが大正 13 年度の細くてバックルのないものに戻っています。

昭和５年制の２代冬服（昭和６年卒業）

昭和 13 年度卒業

昭和５年度の生徒から襟の形がオープンカラーへと変わり、棒ネクタイをつける姿が登場します。従前のテーラーカラーと混在した状態となります。昭和 12 年７月に日中戦争が勃発すると、岡山県の高等女学校では日の丸のバッチを左胸につけさせたようです。矢掛高等女学校では昭和 13 年度の卒業生は全員がつけていますが、翌 14 年度には激減し、15 年度につけている生徒はいなくなります。国民精神総動員運動を推進する上で行われたようですが、長続きはしなかったことが見て取れます。

昭和５年制の夏服（昭和 13 年度卒業）

昭和 13 年制の夏服

昭和 13 年制の３代冬服（昭和 15 年卒業）

昭和 18 年卒業

昭和 13 年度の修学旅行では全生徒がセーラー服の夏服を着ています。夏服は白地の前開きの２つ釦で、襟・袖カフス・胸ポケットの部分が紺地で白線３本が入っています。冬服は紺地で夏服と同じ部分に白線３本を入れ、２個釦がない代わりに棒ネクタイをつけます。戦前期にセーラー服は全国的に人気でした。矢掛高等女学校でも、バスガール型のテーラーカラーよりセーラー服を希望する生徒たちが多くいたのかもしれません。

昭和 14 年制の岡山県標準服

昭和 16 年制の文部省標準服

岡山県では昭和 14 年 10 月に標準服を設け、同 16 年４月からは文部省標準服が施行されます。岡山県標準服は、矢掛高等女学校の昭和５年制のものに似ており、襟の広がったオープンカラーで棒ネクタイをつけます。昭和 16 年以降、文部省は制服を新調する場合には標準服でなければならないとしましたが、物資節約の観点から中古の制服を再利用することができました。

文部省標準服は「ヘチマ襟」と呼ばれ、生徒たちから嫌われました。矢掛高等女学校の生徒も、上級生やお姉さんが着ていた制服を譲り受けようとしたことは想像に難くありません。そのような手段で入手できなかった生徒は、文部省標準服の新調を余儀なくされました。昭和 19 年度の卒業写真では、セーラー服が 51 人、文部省標準服が 46 人、岡山県標準服が４人です。

昭和 19 年（1944）卒業①

昭和 19 年卒業②

矢掛高等女学校では卒業写真だけはスカート姿もありますが、通常時はモンペを穿かなければならなくなりました。生徒たちが憧れたセーラー服姿は、太平洋戦争が終わるまで消えることはありませんでした。下の写真の左側４人は文部省標準服を着ていますが、セーラー服姿の同級生が羨ましかったのではないでしょうか。

矢掛高等学校

昭和 26 年卒業

昭和 27 年卒業

昭和 24 年制の３代冬服

昭和 27 年卒業

昭和 24 年制の夏服（昭和 28 年卒業）

女子生徒の制服は、高女時代のセーラー服を引き継ぎ、棒ネクタイからスカーフへと変わりました。襟・袖カフス・胸ポケットは３本線だが、襟と袖に２本線の生徒も混じっています。白ブラウスの襟を出すボックス型を着る生徒もおり、昭和 26 年度には後に新制服となる左右４個釦がつくものも見えます。

昭和 28 年卒業

昭和 28 年卒業

昭和 27 年卒業

昭和 28 年卒業

男子生徒の制服は、校章が矢掛中学校から矢掛高等学校へと変化したのにともなって、帽章と釦の校章が変わっただけです。セーラー服の左胸の徽章に加えて、襟元に矢掛高等学校を示す菱形の徽章をつける生徒もいました。しかし、女子生徒にはセーラー服の中にテーラーカラーやブレザーなど、制服ではない洋服姿も見られます。戦後復興の過渡期であり、制服の新調を強制していなかったと考えられます。

昭和 29 年制の 4 代冬服（昭和 32 年卒業）昭和 29 年制の夏服（昭和 37 年卒業）

解体前の旧校舎（昭和 37 年卒業）　　（昭和 45 年卒業）

最後の制帽姿（昭和 45 年卒業）

男子生徒の長髪が増加（昭和 48 年卒業）　男子生徒の夏服

昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて全国の高等学校では、男子生徒の制帽廃止と長髪許可を求める動きが活発化しました。矢掛高等学校では昭和 45 年度から長髪の許可をしたと考えられます。昭和 44 年の３年生は全員が短髪で、集合写真では制帽を被っていますが、同 47 年の３年生は全員が長髪で制帽を被っていません。矢掛高等学校では制服は残されましたが、矢掛中学校時代からの伝統的な制帽は姿を消しました。

女子生徒の夏服の青リボン　昭和 50 年から平成３年入学生まで用いられました。

男子は濃緑地のブレザーで金釦２個、左胸にエンブレムをつけ、グレーのズボン、白のワイシャツに茶と濃緑のストライプのネクタイを締めます。女子は濃緑地のボレロ型で金釦４個、釦合わせから裾回りには緑の蛇腹線がつけられています。スカートは緑と紺のチェック柄で、白のブラウスに赤の蝶ネクタイをつけます。

平成４年（1992）制定の冬服（女子５代・男子２代）

男子はグレーのズボンに白の半袖のワイシャツ、女子はグレーと濃緑のチェック柄で白の半袖ブラウス、蝶ネクタイは学年で赤、緑、茶を使い分けています。

昭和から平成への時代の変化と、バブル経済の好景気が重なり、豪華で見栄えのよいデザインを取り入れる学校が増えました。

平成４年制の夏服

平成 16 年制の冬服（女子６代・男子３代）

男女ともに紺のブレザーで３個釦、グレー地のチェック柄のズボンとスカートを穿きます。正装時には白のワイシャツにグレーのネクタイを締めます。

平成 10 年前後になると、バブル期に登場した斬新なデザインの制服は後退した。それに代わって落ち着いた感じの制服が主流となります。

合服には長袖の紺のセーターと、紺と白のベストを選ぶことができます。

刑部芳則（オサカベ　ヨシノリ）
中央大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士（史学）。専攻は日本近代史。現在、日本大学商学部准教授。
著書は『明治国家の服制と華族』（吉川弘文館、2012 年）、『古関裕而』（中公新書、2020 年）、『セーラー服の誕生』（法政大学出版局、2021 年）など多数。2018 年度 NHK 大河ドラマ「西郷どん」で軍装・洋装考証を担当、2020 年度 NHK 前期連続テレビ小説「エール」で風俗考証担当。